

北陸自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書

熊之宮遺跡

1978

新潟県教育委員会

北陸自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書

熊之宮遺跡

新潟県教育委員会

## 序

本報告書は、北陸自動車道の建設に伴い、昭和52年度に新潟県教育委員会が主体となって発掘調査を実施した、長岡市熊之宮遺跡の発掘調査記録である。

本遺跡の調査では、縄文時代中期・後期の土器と後期後半に属する住居跡が検出された。わけても縄文時代後期の住居跡と出土遺物は当地域における縄文遺跡の立地と様相を理解する上で貴重な資料であり、本報告書が研究を進めるうえで、斯界のための一助となれば幸いである。

終りに本調査に参加された調査員の多々静治・本間信昭の両氏、多大な御協力を賜わった長岡市教育委員会及び地元有志の方々、計画から調査実施に至るまで格別の御協力を賜わった日本道路公団新潟建設局・同長岡工事事務所の各位に対し、ここに深く謝意を表する次第である。

昭和53年3月

新潟県教育委員会

教育長 米山市郎

## 例　　言

1. 本報告書は新潟県長岡市宮本東方町字熊之宮地内に所在する熊之宮遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は北陸自動車道建設に伴い、新潟県が昭和52年度に日本道路公団から受託をして実施したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、昭和52年6月1日から6月11日までと6月28日から7月2日まで実施したものである。
3. 遺物の整理作業は県教育庁文化行政課埋蔵文化財担当職員があたった。
4. 遺構・遺物の実測、写真撮影及び挿図などの作成は、調査担当者を中心にして調査員が分担した。
5. 本報告書の執筆は、調査担当者を中心にして、調査員が協議の上、分担執筆をしたもので、文末に執筆者の氏名を記した。
6. 発掘調査にあたり、参加者各位並びに地元区長、長岡市の温かい御支援と御協力をいただいた。また、日本道路公団新潟建設局・同長岡工事事務所から種々の御協力をいただいた。
7. 発掘調査における出土遺物は一括して新潟県教育委員会が保存・管理をしている。
8. 調査体制は以下のとおりである。

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　米山市郎）	
管　理	總　括	福島　寅嘉（県教育庁文化行政課長）
	總括補佐	谷沢　巖（県教育庁文化行政課長補佐）
	庶務管理	湯本　武（県教育庁文化行政課管理係副参事）
	指　導	石塚　達也（県教育庁文化行政課主任文化財主事）
	庶　務	森田　長治（県教育庁文化行政課主事）
調　査	調査担当	舩岡　嘉彰（県教育庁文化行政課文化財主事）
	調　査　員	戸根　与八郎（県教育庁文化行政課学芸員）
		千葉　英一（県教育庁文化行政課学芸員）
		斎藤　基生（県教育庁文化行政課学芸員）
		家田　順一郎（県教育庁文化行政課嘱託）
		竹田　陽子（県教育庁文化行政課嘱託）
		多々　静治（長岡市立宮本中学校教諭）
		本間　信昭（新潟市立入舟小学校教諭）
作　業　員	長岡市宮本東方町・堀之内町・大積善間町の有志	

## 目 次

I 序 説 .....	1
1. 発掘調査に至る経過	
2. 調査の経過	
II 遺跡の位置と環境 .....	5
1. 遺跡の位置	
2. 周辺の遺跡	
III 遺構 .....	7
1. 土層堆積と遺物の出土状況	
2. 住居跡	
3. 長円形溝状遺構・埋甕状ピット遺構	
4. 炭燒窯	
IV 遺物 .....	12
1. 鐘文土器	
2. 石器	
V 総括 .....	20
1. 遺跡の性格について	
2. 遺物について	

## 挿図目次

第 1 図	遺跡周辺の地形と調査区設定状況	2
第 2 図	グリッド設定図	3
第 3 図	周辺の地形と遺跡の分布	6
第 4 図	グリッド層序柱状模式図	8
第 5 図	住居跡実測図	9
第 6 図	A地点造構配置図	10
第 7 図	A地点出土遺物（縄文土器）	13
第 8 図	A地点出土遺物（縄文土器他）	15
第 9 図	B地点・C地点出土遺物（縄文土器）	17
第 10 図	出土遺物（石器）	19

## 図版目次

図版第 1 図	熊之宮遺跡遠景（東側より）・A地点（西北より）・B地点（北側より）
図版第 2 図	A地点住居跡（東側より）・A地点住居跡（西側より）
図版第 3 図	住居跡土層断面図・第 1 号～第 3 号炭焼窯（北東より）
図版第 4 図	長円形溝状遺構（南側より）・第 2 号埋甕状ビット土器出土状況・ 第 2 号埋甕状ビット完掘状況・第 1 号埋甕状ビット土器出土状況
図版第 5 図	第 1 号埋甕状ビット・第 2 号炭焼窯・第 4 号炭焼窯
図版第 6 図	出土遺物（縄文土器）A地点
図版第 7 図	出土遺物（縄文土器）A地点
図版第 8 図	出土遺物（縄文土器）A地点
図版第 9 図	出土遺物（縄文土器他）A地点
図版第 10 図	出土遺物（縄文土器）B地点・C地点、出土遺物（石器）
図版第 11 図	出土遺物（石器）・自然遺物（炭化栗）

# I 序 説

## 1. 発掘調査に至る経過

北陸自動車道は新潟市を起点に富山県・石川県・福井県を経て、滋賀県米原町で名神高速道に接続する延長約480kmの高速道路である。北陸自動車道のうち、新潟県を通過する新潟～長岡間については昭和46年に、長岡～上越間については昭和47年に法線の発表が行なわれ、新潟～長岡間については昭和53年度に開通する予定になっている。

長岡～柏崎間については、昭和49年度に日本道路公団柏崎工事事務所から法線内にかかる遺跡の分布調査を依頼された。県教育委員会はこの依頼をうけて、昭和49年10月に柏崎～西山、西山～長岡と調査区域を二分して遺跡分布調査を実施した。西山～長岡間では長岡市東方町地内(通称熊之宮)の畑地から縄文土器が2～3片採集された。断面等からの観察では地表面下40～60cmで基盤層の黄褐色粘土へ達するが、遺物包含層といわれるものは存在していなかった。この様な現況から本地域が遺跡となり得るか否か疑問があったが、今後調査の実施までの間に遺物の分布調査をして、本地域の取り扱いを決定する事になった。同年11月・昭和50年10月に再度現地調査を行なった。57km付近の畑地から縄文土器片が5～7片採集されたものあまりにも散発的であった。以上のように、遺物の散布が稀薄で、遺物の範囲・内容については全く不明であった。しかし、周辺に縄文時代の遺跡が点在している事実、地形上からも遺跡の立地する可能性がある事から、部分的に試掘調査を実施して遺跡の範囲・内容の確認を行い、本調査を実施するか否かの判断資料を得るために発掘調査を実施する必要性があるという結論に達した。昭和51年6月、本遺跡の発掘調査実施に関する打合せ会を公団・県土木部高速道路課・県教育委員会の3者で行なった。この時、公団から「長岡市の大穂地区の用地買収は昭和51年度の上半期の予定であったが、用地買収が大幅に遅れているため、発掘調査はできない。」という話があった。このため、本遺跡の発掘調査は昭和52年度に譲り越す事になった。明けて昭和52年4月、昭和52年度に実施する予定になっている長岡市熊之宮遺跡・柏崎市下谷地遺跡両遺跡の発掘調査実施に関する打合せ会を日本道路公团新潟建設局と県教育委員会とで行なった。県教育委員会は調査の方法及び概要を説明し、調査実施までに処理すべき問題点、即ち農作物・立木・調査終了後の埋め戻しの件などを公団に処理するよう依頼した。4月下旬、調査に伴う諸条件が完備したため発掘調査を6月1日～11日までの11日間にわたって実施する事にした。5月2日、日本道路公团新潟建設局長と県知事君體男との間で、長岡市熊之宮遺跡及び柏崎市下谷地遺跡発掘調査の委託契約が昭和53年3月31日までという期間で締結が行われた。

(戸根与八郎)

## 2. 調査の経過

発掘調査対象となった地域は、昭和49年10月の分布調査、50年10月の現地調査によって数点の縄文土器の破片が採集されたが、散発的で断面等からの観察では40~60cmで基盤層に達し、遺物包含層といわれるものは存在していなかった。しかし、本遺跡周辺に縄文時代の遺跡が各所に点在していることや段丘縁辺という地形からも遺跡の存在する可能性が考えられることから部分的に試掘調査を実施して遺構・遺物の存在の有無について判断資料を得ることを目的とし、確認された場合は本調査に切替えることにした。調査期間は昭和52年6月1日~11日並びに6月28日~7月2日である。グリッドは、本線予定工区間52km~58km工区の全体範囲に20×20mの大グリッドを区画し、北から南をI~IVのローマ数字を、東から西へA~Zのアルファベットを付し、各大グリッドの中を北から南へ1~10、11~20の様に短冊形に並行して2×2mを1単位とする100グリッドを設定しアラビア数字を付しA I 1, Z VII 100等とそれぞれ



第1図 遺跡周辺の地形と調査区設定状況

の記号と数字の組合せをもってグリッドの名称とした(第2図・第6図)。

(福岡嘉彰)

### 調査日誌

4月28日 長岡市教育委員会に出向き調査実施につき説明し、協力を依頼する。宮本堀之内町区長原聞其・東方町区長関野昇平・大槻善間町区長五十嵐保を訪ね作業員の手配等の協力を依頼し、了解を得る。

6月1日～2日 1日、11時現地着。発掘資材を搬入する。関係者にあいさつまわりを行った後、道路法線内52km工区～58km工区に渡る延長600m、山60～120mの工事予定区域全体を覆うべく調査区を設定し、新田沢の東側からグリッドの設定を行う。午後、柏崎工事事務所小島庶務課長來訪。調査方法と計画について現地説明をする。2日、グリッド設定完了。

6月3日～6月5日 3日より作業員を導入する。52グリッドの素掘完了。J III 1で縄文中期土器片3点検出。4日、新田沢の西O・P・Q区グリッド設定。午後、県文化財保護審議委員中村孝三郎・越後古代史研究会神林昭一・市教育委員会駒形学芸員來訪。5日、S～Z区設定のグリッド素掘完了。A・B・F・G・N区内設定の11グリッド完了。B III 76で土器片2点検出する。

6月6日～6月9日 6日、S～Zラ



イン完了。グリッドのセクションを深掘し層序を実測する。BⅢ41で土器片9点、BⅢ71で凹石、土器片6点が出土する。7日、BⅡ・Ⅲ区で住居跡のコーナーを確認。床面上に焼土・炭化物の霜降状堆積を確認する。住居跡の床面に掘込まれた近代灰焼窯を検出。S～Yラインのセクション図作成、標準層序は3枚である。IⅢ91で土器片、LⅢ6で磨石、BⅢ61で凹石が出土する。8日、A～Lライン各区の点検とB・G・HのⅢ区の杭打ち及びP～Z区のレベルを記入する。9日、IⅢ81～84、73～74を拡張。BⅡ・Ⅲ区域内を集中調査する。住居跡断面図作成。住居跡内より石斧頭部・石匙が出土。この地点を熊之宮A地点と呼称する。

6月10日～11日 10日、午後、器材の整理撤収準備に係る。11日、遺構の実測・写真撮影をもって第一次調査を終了。関係者・機関に挨拶まわりの後帰京する。今回の調査区は191グリッド、764m<sup>2</sup>である。

6月13日 文化行政課石塚主任文化財主事・金子文化財主事・福岡文化財主事・千葉学芸員は現地で確認点検を実施し、今後の措置につき検討を行なった。

6月14日 埋蔵文化財班会議を開き意見交換・討議を行なう。A地点は住居跡が検出されており、単基か複数かの確認調査の必要があるとの観点から日本道路公团と協議し、6月28日～7月2日まで継続調査の実施を決定した。

6月28日 器材搬入。柏崎工事事務所小島庶務課長来訪。

6月29日 BⅢ74で灰焼窯検出。BⅢ86・97、CⅢ7・8は遺物が集中出土する。

6月30日 午前中大雨の中、出土遺物をプロットし、ローム直上5cmを削平。精査は明日とする。C地点にグリッド4ヶ所を設定、表土層より2点の土器を得る。

7月1日～2日 1日、ローム面まで精査、遺物の出土は表土下の褐色土層に集中する。2日、BCⅢ区の土器集中地点の取上げ、AⅡ・Ⅲ崖縁辺部の確認をする。BⅢ86と79の土器は埋蔵状ビットに作る事が判明した。79の土器は栗炭化物を内蔵しビットに密着状態で検出された。追調査では灰焼窯2基、牛骨埋葬穴1基を確認する。遺構を1/10スケールで実測・撮影をもって現地調査を全て完了した。第二次調査は約50グリッド、200m<sup>2</sup>である。

(福岡嘉彰)

## II 遺跡の位置と環境

### 1. 遺跡の位置 (第1図・第2図)

熊之宮遺跡は長岡市宮本東方町字能之宮字八幡に所在する。長岡市は新潟県のはば中央に位置し、市域の中央を北流する信濃川とその支流を中心している。地理的には信濃川を中心とした沖積地とこれをとりまく丘陵、段丘からなる。このうち、信濃川の西岸には比較的なだらかな西山丘陵、曾地丘陵、八石丘陵、関田丘陵などが並走しており、その丘陵間を流れる黒川、渋海川は谷となり、それぞれの小地域を形成している。本遺跡の所在する熊之宮は、曾地丘陵の東側、黒川左岸(北岸)の段丘上の先端、標高約55mにある。この段丘は北側と西側は沢によって画され、南側は黒川にのぞむ崖線となり、扇形の平面を呈し、沖積地との比高差は約15mを測る。段丘上は北から南にむけてゆるやかに傾斜をし、段丘面をえぐる小支谷がいくつかみられ、溜池が造成されている。

(植岡嘉彰)

### 2. 周辺の遺跡 (第3図)

長岡市周辺の遺跡は丸山松夫氏(丸山 1956)や中村孝三郎氏(中村 1966)らの調査にはじまり、昭和47・48年度の全県の分布調査、さらには新幹線、北陸自動車道、長岡ニュータウン等の調査によって、分布状況はかなり明確にされた。第3図はこれらの成果をもとに、縄文時代の遺跡を示したものである。

まず黒川流域の谷には20箇所ほどの遺跡が認められる。このうち、黒川本流の谷には五百川遺跡、七軒町遺跡、畠田裏山遺跡、上の畠遺跡、平山遺跡、百合畠遺跡、新林遺跡などがあり、さらに黒川支流の小支谷にも片田遺跡、金塚遺跡などいくつかの遺跡が点在する。片田遺跡は昭和51年に発掘調査が実施され、中・後期の遺物が出土した(戸根 1977)。金塚遺跡では平野を中心とした住居跡が2棟重複して検出された(丸山 1956)。時期としては中期・後期の遺跡が多く、小規模な遺跡が主体となっており遺物の散布も稀薄である。こうした遺跡の性格は地理的な条件からくるのかもしれない(戸根 1977)。

一方、広大な沖積地をひかえた段丘上、たとえば越路原、朝日原、関原、千石原には、比較的大きい遺跡が立地する。中期の馬高遺跡、岩野原遺跡、後期の三十畠場遺跡、南三十畠場遺跡、並松遺跡、藤崎遺跡などがこれにあたる。これらの遺跡は継続的な定住圏を形成するものと考えられ、遺物の出土量も多い。この傾向は黒川流域の状況と対照的である。このようにしてみてくるならば、熊之宮遺跡は黒川流域のうちでも、谷が平野にむかって開く地点に位置しており、周辺地域のなかでの遺跡の性格が注目されるものである。

(植岡嘉彰)



第3図 周辺の地形と遺跡の分布

(国土地理院「長岡」柏崎 1:50,000原図 昭和48年発行)

1. 鹿之宮遺跡
2. 片田遺跡
3. 金山遺跡
4. キザワシ遺跡
5. 金塚遺跡
6. 沢の入遺跡
7. 大平遺跡
8. 五百川遺跡
9. ホテラバ遺跡
10. 使山遺跡
11. 百合畠遺跡
12. 薩沢遺跡
13. 平山遺跡
14. 七軒町遺跡
15. 煙田裏遺跡
16. 上の畠遺跡
17. カラヨミ遺跡
18. 牛池遺跡
19. 新林遺跡
20. 花立遺跡
21. 藤ノ巣遺跡
22. 櫻音山遺跡
23. 城扣遺跡
24. 三十宿場遺跡
25. 馬高遺跡
26. 転堂遺跡
27. 藤橋遺跡
28. 岩野原遺跡
29. 山王遺跡
30. 朝日遺跡
31. 上並松遺跡
32. 釜ヶ崎遺跡

## ■ 遺構

### 1. 土層堆積と遺物の出土状況

本遺跡の土層堆積状況を柱状模式図で示すと第4図の如くである。Rの南北軸より以西のバーキングエリア予定地区で得られた層序を基準に、I・耕作土、II・褐色土、III・ローム質土、IV・黄灰色砂質粘土(部分的に小砂利含む)とする。この他、谷等で部分的に見られる土層もある。I~IVの堆積は本遺跡に普遍的に存在する。II層が遺物包含層であるが、実際に遺物の出土したところは遺跡全体の中では非常に限られた地点である(第3図)。EⅢ1からWⅡ10までの東西ラインについて、EⅢ1の東、LⅢ1とQⅡ1、TⅢ1とTⅢ91、WⅡ10にそれぞれ谷が入っているがTⅢ1を除き極端な谷埋め、斜面堆積は見られない。S・TのIV・V区域は削平し谷埋めをしタバコ畑を造成したところで表面にローム質土層を見る。J・R・W列の南北ラインについても大きな層序差は認められない。J列のI層とII層の間層は最近までの畑作実施の結果生じたものであろう。RⅢ1は十数年前に水田を杉林に転換したところで、斜面に厚くI層が被っている。W列は畑になっていた割合には層序が乱れていない。西隣のY列では畑により削平された結果耕作土の直下-15~20cmでIV層となっている。周辺部は杉の植林、桐の植株がみられ、桐抜根の跡が穴状に認められる。A-A'の柱状図は図示しなかった。A'の東斜面西寄りは削平され水田・畑の造成のため攪乱が著しいが、住居跡が検出された東寄り台地はきれいな堆積状態を示している。遺物・遺構の検出されたA~BのII・IIIをA地点、I・JのIIを中心C地点、PⅢの出土地点をC地点と称した。

(斎藤基生)

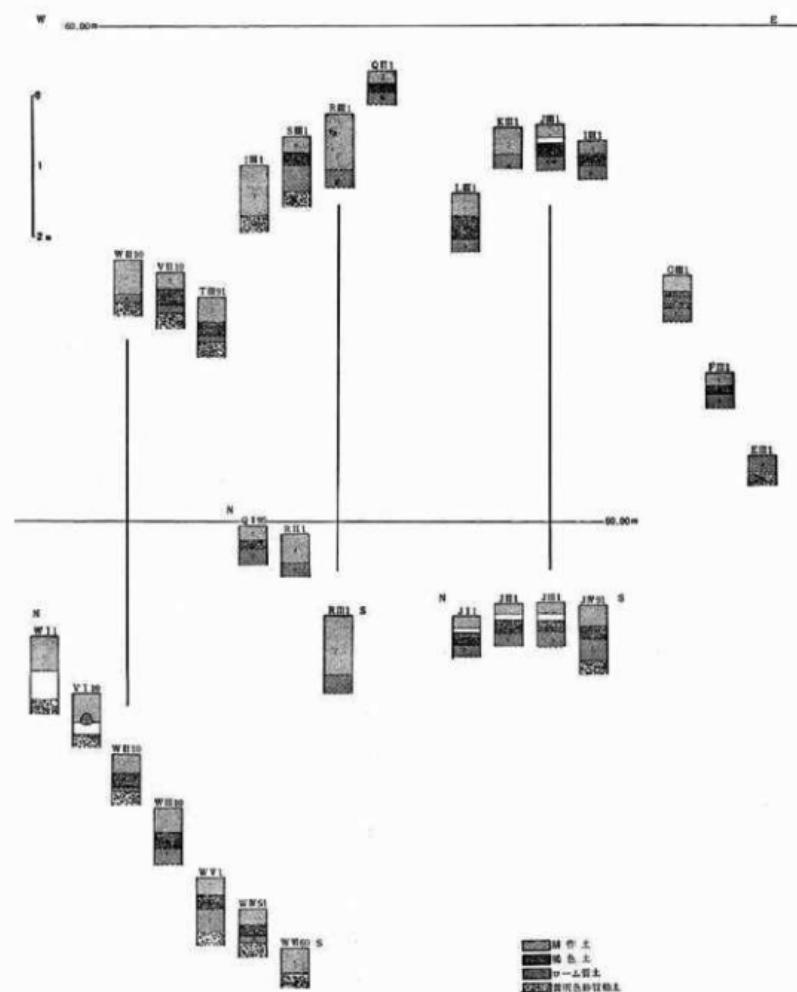
### 2. 住居跡 (第5~6図・図版第2~3図)

本住居跡はBⅡ70・80・89、BⅢ62・72・82の各グリッドにかかるて検出されたもので、羅文時代後期後半の土器を伴う堅穴住居跡である。

住居跡の土層堆積は次のとおりである。I:耕作土であり褐色土層で軟く粘性もしまりもない。II:しまりのある褐色土層である。III:暗褐色を呈しやや粘性がある。少量の炭化物を混入した遺物包含層である。IV:黄褐色の漸移層で粘性がある。V:明黄褐色のローム質粘性土層である。堅穴住居の掘込みは第V層の明黄褐色のローム質粘土層に掘り込まれている。

周溝及び柱穴は検出されなかった。炉跡の位置は2ヶ所にある。南壁に接するものは150×70cm、壁の上面より-42cm、中央部の炉は-62.5cmを計る。焼土中に微細な炭化物が混入し床面がやけている。石組施設・埋甕等はみられないで床に直接焚火をしたものであろう。

周壁は、床面からの壁高は南側の円弧の部分が最も高く45.5cmを計り、残存壁中最も低い部



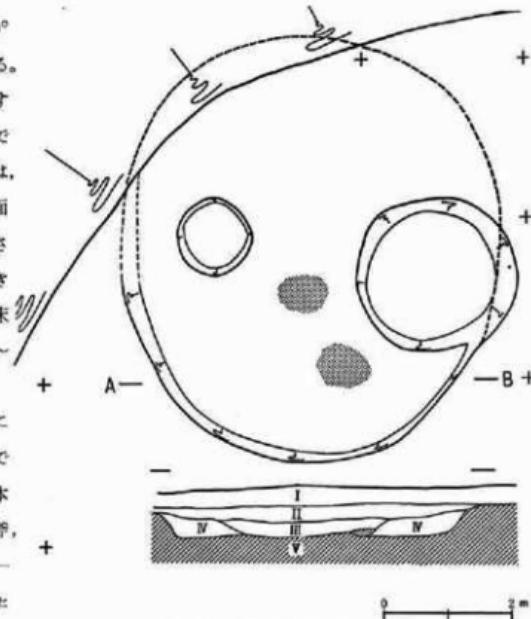
第4図 グリッド層序柱状模式図

分で20cmを計り床面に対して120°～130°の钝角的傾斜を有している。北側の壁面は谷に向って緩傾斜する地山の自然地形にそった状態で消滅している。消滅というよりは、傾斜面については黒色土層に壁面が存在したのではないかと推定されるが、今回の調査では確認できなかった。崖線に近い掘り方の床面部分と最高床面のレベルは32～40cm近い比高差がある。

本住居跡のプランは、構築時ににおいては径5m程の円形プランであったであろうと推定される。本住居跡からは第10図1の磨製石斧、2の石匙が出土し、国版第6図—8・13、第9図—3等の土器がセクションベルトから検出され、特

に国版第6図1は住居跡覆土の破片と住居跡外のBIII95の土器片と接合されたものである。

(福岡 嘉邦)

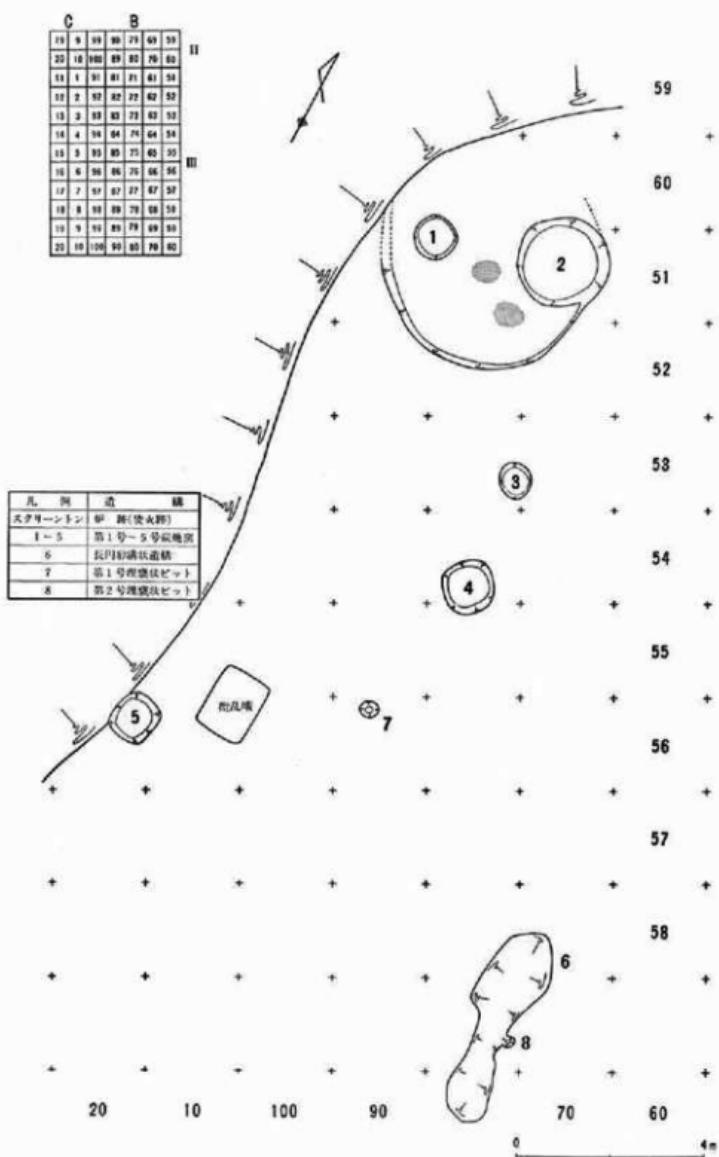


第5図 住居跡実測図

### 3. 長円形溝状遺構・埋甕状ピット遺構 (第6図・国版第4図～5図)

椭円形の浅い溝状の遺構で第2号埋甕状ピットのあるほぼ中央部で瓢箪形にくびれる。断面は浅い漏斗状を呈する。溝の長軸は4.35m、最大巾1.35m、最狭部分の巾は5～9cmで基盤層の明黄褐色のローム質粘土層を掘込んでいるが、壁の周縁部は比較的ゆるやかに切立たずに落ち込んでいる。BIII68～70に接する東側の周縁部は7～8cmの比高差で西側周縁よりも高い。溝の北部分の最深は22～26.5cm、南部部分では10～19.5cmを計る。BIII80～BIII68と78の中間に向けてほぼ磁北にそって細長く伸びている。

第1号埋甕状ピットはローム質粘土のレベル128cmより-13cmの深さを計る浅いピットであり上面の褐色土から掘込まれたものであろう。径は40×30.5cmで第8図1の土器の一部破片が直立し、大半は上からの土圧で押つぶされた状態で重なりあって検出された。土器の内外面は炭化物が付着しており、ピットの浅いことから底部を直立させ、住居跡外部の広場における厨房用と推測されるが、ピットの周囲には焼土等の痕跡は見当らない。検出位置はBIII86であ



第6図 A地点造構配置図

る(第6図・図版第4図～5図)。第2号埋甕状ピットはBⅢ79に位置し、長円形の浅い漏斗状断面を呈する溝状遺構の中央くびれ部分に当る。径25cmの円形でローム質土を-20cmの深さに土器側面部を地山に密着した状態で出土した(第6図・図版第4図)。土器の破片は上部から押つぶされた状態で器面内側へ堆積していたが、接合してみても頸部の刻目凸帯より下部のみで口縁部は検出されていない(第7図15・16)。炭化した栗がコップ約1杯半程度内蔵されていた(図版第11図)。上記の溝状遺構と関連するものであろうか。土器の器外面は地山とすきまなく密着して張付いた状態を呈していた。

(福岡嘉朝)

#### 4. 炭燒窯(第6図・図版第5図)

熊之宮遺跡の発掘調査ではA地点において近・現代の炭燒窯が5基検出された。第6図の如く第1・2・5号は台地の傾斜面崖線部近くに構築され、第3・4号は平坦地に營なまれている。

**第1号炭燒窯** 形状は円形を呈しており、上面の長径90.5cm、短径90cm、底面長径80cm、短径70cmを計り底面は椭円形を呈している。底面中央は-5cm程度く皿状に凹み、硬く焼けている。

**第2号炭燒窯** 上面の長・短径ともに2mの円形プランを呈する。底面長径は168cm、短径は155cmを計り椭円形を呈する。東側壁高72.5cm、西側壁高49.3cm、南側壁高48.5cm、北側壁高50.5cmを計る。底面は平坦で東南から北西へ18.5cmの比高差で傾斜している。西南壁はやや垂直に近く、東壁面で外傾する。底面及び壁面は硬く焼けており、火勢を受けた壁面は1～2cm前後の厚さで赤褐色を呈し、粉末状の木炭が付着している。内部には木炭の粉末及び5～7cmの原形を保つ木炭が少量混入した黒褐色土が堆積していた。

**第3号炭燒窯** 上面の長径80cm、短径70cm、底面長径60cm、短径54cmの椭円形を呈する。底面中央で壁高は15cmを計り平坦面をなす。壁はやや内傾する。

**第4号炭燒窯** 上部・底面共に隅丸方形を呈する。上面長径114cm、短径108cm、底面長径90cm、短径84cmを計る。

**第5号炭燒窯** 形状隅丸方形を呈し、上面長径102cm、短径94cmで方形に近く、底面は長径80cm、短径70cmを計る。崖線にかけてやや傾斜をみせるが、中央部で壁高18.3cmを計る。

第1号から第5号とも第1層から掘込まれていると考えられる。炭以外に遺物はまったくない。

(福岡嘉朝)

## IV 遺 物

本遺跡で出土した遺物は縄文土器片を中心に石器・中世陶器片・自然遺物である。A地点は最も多量に出土し、出土状態は埋甕状ピットの深鉢土器以外はすべて破片となっており、縄文後期の土器を平箱にして2箱程度出土した。B地点からは縄文中期の土器を出土し、C地点では縄文土器片2片を出土したのみである。縄文土器の記述にあたっては総体的に出土量が少ないので地点別になるべく1点ごとの特徴を記し、あわせて出土地区を記載した。

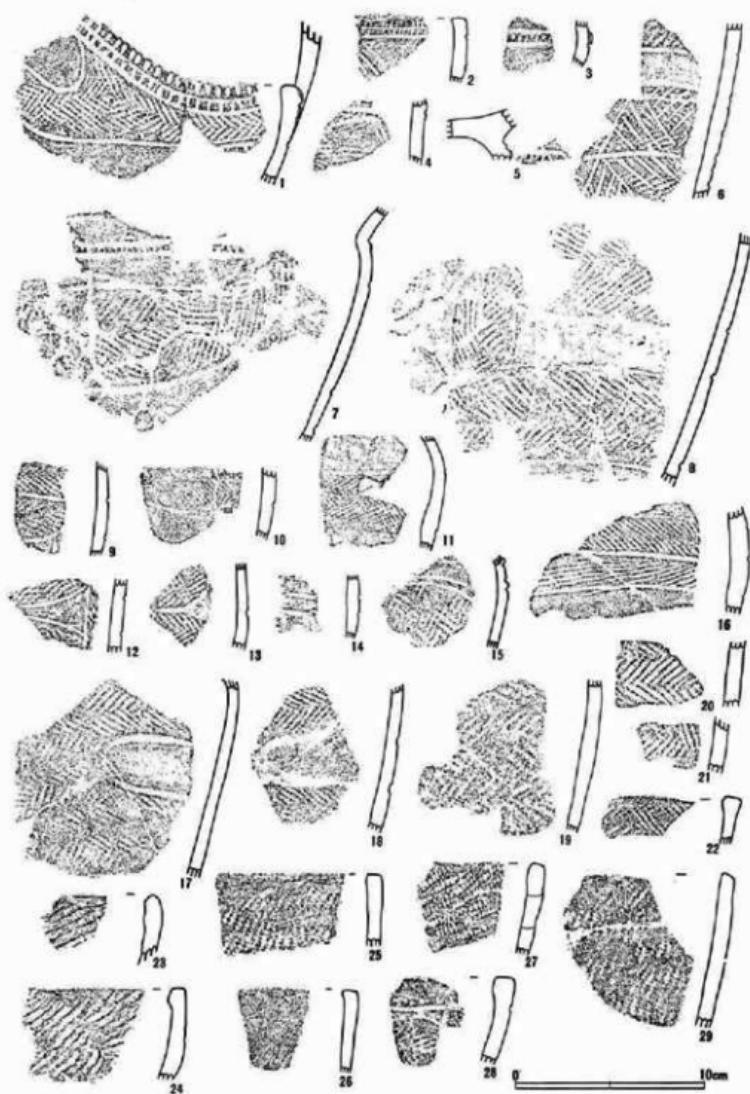
### 1. 縄 文 土 器

#### A地点の土器（第7図1～29・第8図1～21・国版第6～9図）

A地点の土器は羽状縄文を有し、曲線あるいは横位の区画による磨消縄文を有するもの、連續刻目を有するもの、発達した波状口縁を有するもの、平縁のものなどがみられる。器形には深鉢土器と台付土器が認識できる。時期的には単一の時期を示すものであり、以下文様・器形・出土グリッドを記して説明する。

第7図1～18は器面に地文以外の文様を有する土器片である。1は焼成良好で堅敏な大波状口縁である。口唇部は平坦に削られ、やや内側に彎曲している。口縁に沿って平行沈線と2列の連續刻目文が施される。地文はLRとRLの組み合せによる羽状縄文が施され、雲形文に磨消されている。施文の工程は縄文を施してから口縁の平行沈線・刻目がなされ、その後に沈線による区画と磨消が行なわれた（BII62）。2は口縁部破片で口辺に平行沈線を施し、刻目で沈線間を充たし、その下に斜位の沈線が2本みられる。小粒砂を含む（1住セクション）。3は焼成良く、胴部の張り出し部分と考えられ、1本の粘土帯をはりつけその上に刻目が施される。凸帶の上下に浅い沈線が施されその他は無文である（1住セクション）。4は焼成も良くRLの縄文を地文とし、上部の平行沈線間に刻目が施されている（BII62）。5は脚部に浅い平行沈線があり、その間はやや膨らみ凸帶状を呈し、刻目を施している。器底径約8cmの台付土器である（BII70）。6はLRとRLによる羽状縄文を地文とし、上部を磨消による無文帯とし、胴部に左右から斜位に沈線を施している（BII99）。

7・8及び国版第7図1・2は同一個体の土器であり、第2号埋甕状ピット（BII79）及びその周辺耕作土から出土したものである。焼成は並であり、胎土内に白色小粒子を多量に含む。14は二次焼成を受けており器面は荒っている。いずれも胴部破片であり、胴部から頸部にかけて幾分屈曲し口縁が外反する深鉢土器と思われる。頸部に3mm程の微隆帯がめぐり、その上に刻目が施されている。胴部はRLとLRによる羽状縄文を縱・横位に施し、縱と横に区切る弧



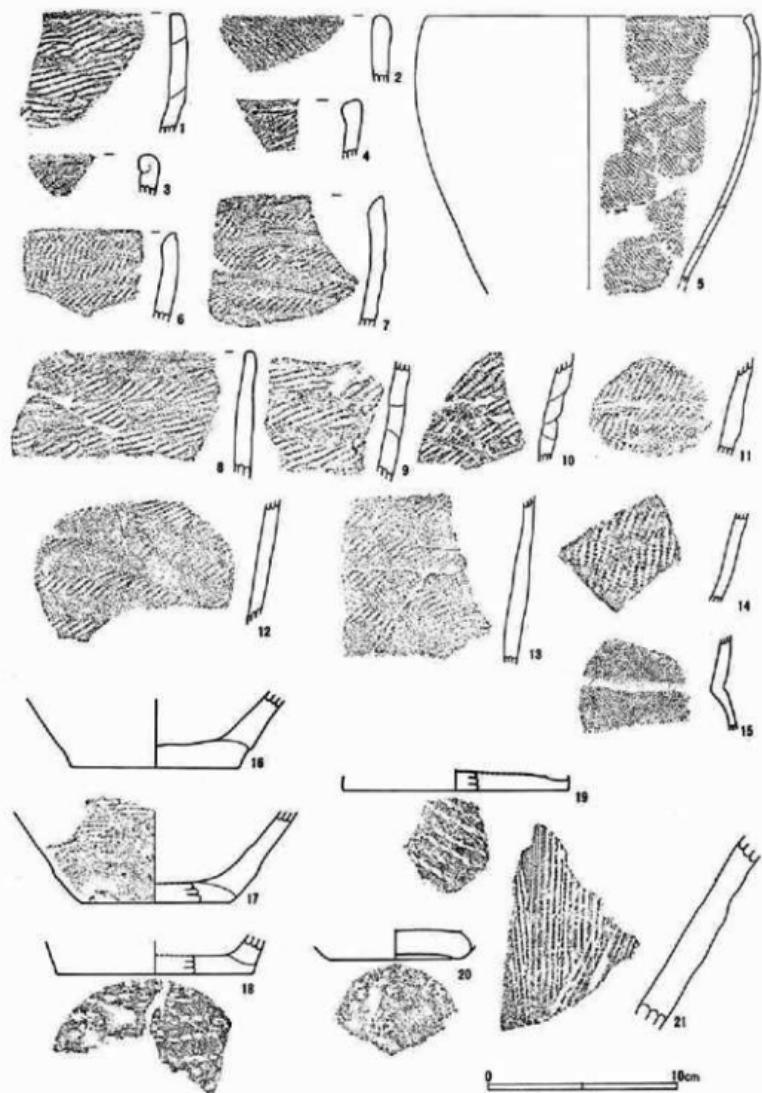
第7図 A地点出土遺物（縄文土器）

状の沈線により区画して内部を研磨し無文部を構成している。

9～18は沈線で無文部分と纏文部分を区画する深鉢の胴部破片である。9は胎土内に砂粒を含み、横位沈線によって区画された中にLRとRLによる羽状纏文を施す(1住セクション)。10・11は同一個体と考えられ、11は磨滅が著しい。LR纏文を縦位と横位に施して羽状とし、沈線により区画され無文部とわかれる(BII61・71)。12は全面に炭化物が付着し、断面弧状の浅い沈線で張文を描き区画内を磨消し、区外にRL纏文を施している。焼成が良く胎土中に白色小粒子が混入する(BII72)。13は胎土内に砂粒を含み沈線で三叉状に切り込んだあとでその外部にLRとRLによる羽状纏文を施している。14は焼成良好で堅緻であり、横位沈線が4本あり、沈線間は無文である(CIII46)。15は半截竹管による曲線で区画され山形にLRとRLによる羽状纏文を施したものである(1住セクション)。16の上部は炭化物が付着し、下部は二次焼成により赤変している。3本の深い横位沈線により区画し上下を磨消している。RLの纏文を横位と縦位に施し羽状をなす。焼成良好胎土内に小砂粒を混入する(BII72)。17・18は同一個体と考えられる。焼成は不良で胎土に小砂粒を多量に含み、内面に厚い炭化物の付着を認める。約5mmの太い沈線による区画内は磨消され、区画外はLRとRLによる羽状纏文が施される(BII56・79)。

19はLRとRLの纏文を横位に上から交互に施した羽状纏文が見られるが、一見イナズマ状を呈している(BII71)。20・21はBII66出土であり、LRとRLによる羽状纏文が施される。

第7図22～29・第8図1～4・6～8は口縁部破片である。22は口唇部が平坦で肥厚し、やや内側する口縁を呈する。LRとRLによる羽状纏文が施され、外側にはタール状の炭化物が付着する(BII99)。23の口唇はやや内側に彎曲し、内面に胎土を指でかぶせたようになっており、口唇断面は尖る。LRの纏文を横位に施す。24は条の短いLRの纏文(0段多条)を施している。口唇部は平坦で余った胎土を内側に押付けて整形している。胎土はやや白っぽい。25は1住セクション出土で、口唇部近くに炭化物が付着する。口唇部は偏平にそれが平縁をなし、地文はLR纏文である。26は口唇は平らで内側にやや張り出している。焼成は良いが外側が剥落し纏文原体は不明である(BII72)。27は焼成も良く、胎土に砂粒を含む。口唇は平坦に削られやや内側する。内面はヘラ状工具により研磨されている。LRの纏文が横位に施されている。28は口縁の下に1本の沈線が施されその下にRLの纏文がつけられる。口唇は平坦に削られやや内側する。内側は胎土の影響か赤色を呈する。29は口唇部が外側へややそがれた様になり、端部は内側に多少切り立っている。第8図の1は成形痕が残り、口唇部は平らに削られやや内側し、内側はヘラ状工具で整形されている。2は焼成も良く、二次焼成により赤変・黒変している。胎土は砂粒を含み、口唇は丸くなっている。RLの纏文が口唇部ぎりぎりまで施されている。3は口唇部が内側に強くおりまげられて、口唇は丸くなっている。LR纏文が施されている。4はLRの纏文が施されている。口唇部は肥厚し内側に削られかつ彎曲している。



第8図 A地点出土遺物（縄文土器他）

以上の口縁部破片の大部分はBⅢ79から出土している。6・7はやや内傾し、口唇部を内側にそがれている。LRの縦文を施したあとで部分的に指頭で磨消している(CⅢ7)。8の口唇端部は横位のなで整形をなされ、縦文LRが横位に施されている(BⅢ86・第1号埋甕状ピット)。

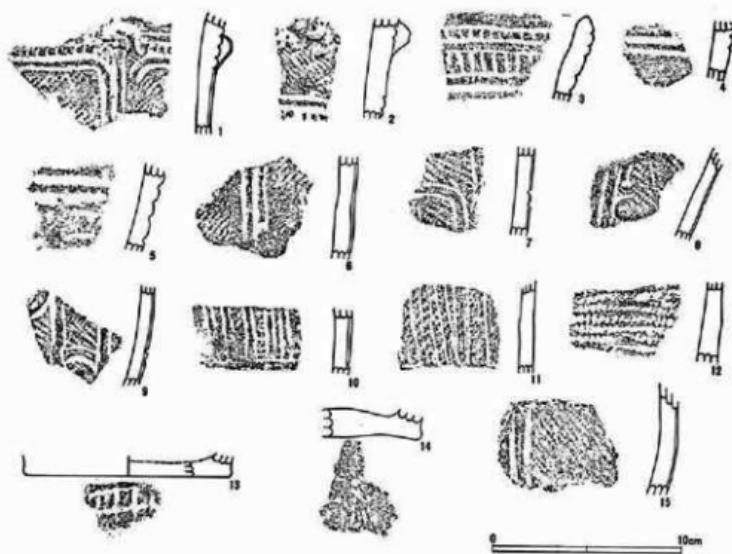
5はBⅢ86の第1号埋甕状ピットから出土したものである。口径35cmで、口唇部はやや内傾し比較的厚みをもち、内側にそがれている。内面は比較的なめらかで胴下半部にやや厚く炭化物が付着している。外面全体にRLの縦文が横位に施文されており、口縁部近くに横方向の擦痕がみられ、口唇部は縦文施文後になでられている。断面には5段の輪積成形痕が観察される。

9～15は胴部破片である。9～14はいずれもLRの縦文が施されている。9・10は同一個体であり、粘土の接合部分の状態がよく伺われる(BⅢ72・79・CⅢ7)。13は内面に炭化物が付着している(1往セクション)。15は頸部でくびれ、そのくびれ部に1条の沈線をもつ無文の外反する土器である。

16～20は底部破片である。16は焼成良好で堅く底径10cmを計り、胴・底部共に無文で胴部との接合部を明確に残している。17は底径8.5cm、胴部にはLRの縦文が施され、底面との境に押圧による凹みがある。胴・底部の接合部は16と同様である(CⅢ8)。18は二次焼成を受け赤変しており、底部に縦の压痕と考えられる痕跡がある(BⅢ78)。19は底部と胴部の接合部分で抜けており、底部には18と同様の痕跡がある。21は灰色を呈する中世陶器でスリ鉢の底部近くの破片である(CⅢ39)。

#### B地点の土器 (第9図1～14・国版第10図1～14)

B地点の土器は総じて縦文中期前半の土器片であり、赤褐色または褐色の色調を呈し、焼成は比較的良好。1～9は半截竹管による半隆起線によってモチーフを構成している。1・2はC字状の爪形文を半隆起線上に施し、粘土の貼付け瘤をもっている。地文はともにLRの縦文である。半隆起線文で4単位の文様を構成するものであろう。3は1・2と同様の爪形文と蓮華文が退化したと考えられる縦位の半隆起線が施されている。6～9はLRの縦文を施したのち半隆起線文を施している。8は所謂B字状文の1つであろう。10は縦位に半隆起線を引き、その間に刻目及びLRの縦文を施文している。11はLRの縦文を地文とし、その上に半截竹管による縦位の半隆起線を引いている。12は焼成が不良で内面は剥落し、外面にはLRの縦文を横位に施している。13・14は底部破片である。13は底径11cmで、底面に網代状の痕跡がみられる。これは経縫とも竹様の材料を編んだもので、1本越え、1本潜り、1本送りであろう。以上の土器はIⅢ93・94を中心にIⅢ6・79・86、JⅢ1・79から出土している。



第9図 B地点・C地点出土遺物（縦文土器）

C地点の土器（第9図15、図版第10図15・16）

C地点の土器は2点のみである。15は焼成も悪く内面はもろい。R Lの縦文を施文している。  
図版第10図16は焼成・胎土とも不良で、内面に炭化物の付着する無文の土器である。

（植岡嘉形）

## 2. 石 器 (第10図1~11, 図版第10図・図版第11図)

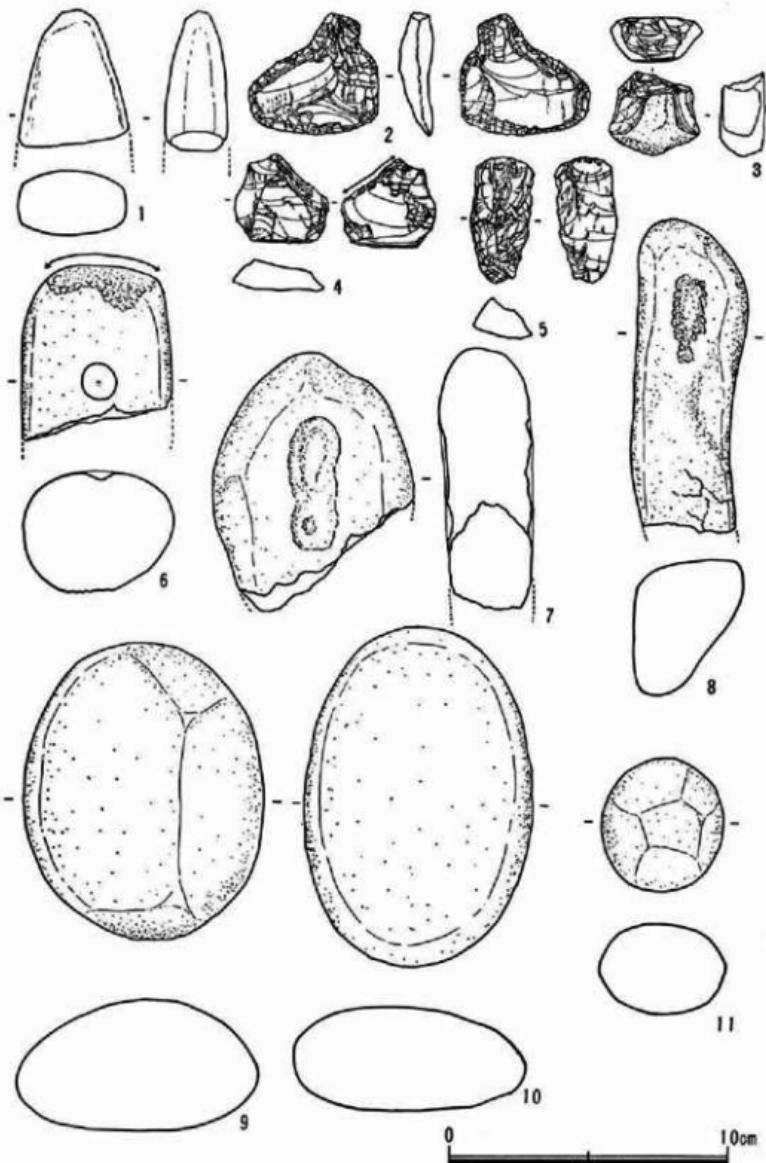
1. 磨製石斧頭部破片 (砂岩) 現長4.5cmで刃部を欠く。風化が顯著で各部に剝落がみられ詳細な観察は困難であるが、残された研磨面には數本の稜線があり、多面の研磨面により調整されたことがうかがえる。横断面は隅丸の長方形を呈し、側面が平らな定角式の特徴を表わす。

2. 模型石匙 (頁岩) つまみ部の頭に縫面を残しており、そこが剝片を得る際の打面になっている。横長剝片を利用し、主要剝離面の一部には鋸理面が残されている。調整剝離は表裏面とも全周に及んでいるが、それほど深くはなく素材はあまり変形されていない。刃部使用痕は観察できなかった。 3. スクレイパー (チャート) 径およそ3cm前後と思われる偏平な円錐を素材とし疎の半周に片面から大きく4回剝離を加えた後、さらに5回の剝離を加え刃部を作出している。裏面には3回の剝離がみられ、さらにパンチ痕を思わせる傷が7ヶ所ある。刃部に使用痕による刃こぼれがみられる。 4. 使用痕のある剝片 (頁岩) 主要剝離面の末端は繰番剝離 (ヒンジファクチュア) を呈している。表裏ともいくつかの剝離がみられるが、統一的に一定の「形」を作ろうという意図は認められない。実測矢印部分に使用による刃こぼれがみられる。 5. 剥片 (安山岩) 頭部に縫面を残しており、そこが剝片を得る際の打面になっている。表側の剝離は中央稜線から外側へ向って加えられており、他の剝片とは著しい違いをみせている。 6. 凹石 (砂岩) 約6cmが現存している。現存部の片側に径1.2cm、深さ2.5mmの円錐形の凹みを持ち、反対側は径1.5cmのごく残い戦打痕様の凹みがある。全体に熱を受けているが割れ口を観察すると被熱後割れたことがわかる。また図の矢印の範囲に戦打痕があり「戦石」として使用されたことを示している。戦打された面には熱を受けていない部分が顔を出しており、凹石が被熱後割れてから戦石に転用されたことがわかる。凹みのある面は非常に滑らかであり、凹みと滑らかな面とは何らかの関係があるものと推定されるがあきらかではない。

7. 凹石 約4cmが現存している。現存部の片側に径1.5cm程度の連結した凹みを持ち、反対側に径2cmの凹み1個と径1cm程度の凹み2個をもっている。疎の旧態をよくとどめ、定形化しておらず凹石としては特異である。 8. 蕈石 (砂岩) やや角ばった棒状の疎を利用し、その一面の一部に戦打痕を残している。その一部を欠いているが全体によく疎の旧態をとどめている。被熱によりよく焼けている。 9. 磨石 全体によく磨かれているが、使用によるものか否かは判然としない。横断面は片面が平らな凸状を呈している。最大厚は中心からはずれている。一部に熱を受けた痕がある。 10. 磨石 石質が軟かいためか全体が摩耗している。構断面は扁平であるが、最大厚は中心からずれている。 11. 磨石 全体が面取りをしたように磨れており、多面体を呈している。非常に小さく磨石としては特異な形態をしいてる。

以上の他に剝片が2点出土しているだけで、非常に貧弱な遺跡であることは否めない。

(斎藤基生)



第10図 出土遺物(石器)

## V 総括

### 1. 遺跡の性格について

長岡市周辺の遺跡については丸山松夫氏・中村孝三郎氏等によって詳細な分布調査がなされている。しかし発掘調査が行なわれた遺跡は数少なく、ほとんどの遺跡は未調査でその性格が不明なものが多い。昭和47年以降、新幹線・北陸自動車道・長岡ニュータウンなどの開発に伴ない、当地域周辺の遺跡分布調査を実施する機会が増加してきた。特に昭和51年・52年に実施した当遺跡と黒川を望む対岸、長岡ニュータウン建設地域内の分布調査（新潟県 1977）及び刈羽村片田遺跡の発掘調査により、当地域の遺跡分布の実体が把握され、その考察から遺跡立地の性格分析が試みられた（下根 1977）。それによれば、①長岡市西部は地形的には信濃川左岸にあたる、信濃川・渋川・黒川などの冲積地、②越路町の越路原・朝日原、長岡市の長峰原・関原・岩野原、三島町の千石原など高燥で広大な段丘面及び丘陵先端部、③長岡市宮本東方町以西黒川流域の小河川の形成するV字谷とその比較的緩かな丘陵の傾斜度の少ない尾根線上、丘陵先端の平坦地、小沢地内、など凡そ3地域に分類され、それぞれの地域によって遺跡の性格がことなるとした。そしてその要因は地形の制約によるという。

馬高遺跡・三十畠場遺跡・岩野原遺跡・藤橋遺跡などの大集落遺跡が高燥な丘陵先端部の広大な段丘面に立地するのに対し、③の地域である黒川流域のV字谷にあっては、遺跡の大半は基盤層まで浅く遺跡の規模は小さく、土器や石器が若干採集される程度である。

さて、熊之宮遺跡は③地域に属し背後の丘陵地と真近に接し地形的制約から系統的に定住する生活領域が狭く、黒川・信濃川冲積地を経て第2地域へ移行する中間的位置を占めている。

住居跡は丘陵崖端に営なまれ、住居跡の多くは斜面部に当り床面並びに壁は検出されなかつた。遺物の検出も第二次的な後世の炭焼窯構築による搅乱が認められるが、住居跡が比較的狭小であるにもかかわらず、長円形の溝状遺構、2個の埋甕状ピットなどの外部施設を有し遺物の検出も住居外の平坦部広場に集中していることと、ほとんど單一の時期で時間差が認められず、短期間の生活領域を示している。住居跡の建設も本格的でないことからも季節的キャンプ的性格がうかがわれる所以である。埋甕状ピット2のクリの炭化物の検出から降雪期を前にした一時期の生活痕とその廃棄と考えられないだろうか。

熊之宮遺跡A地点についていえば「丘陵末端部の斜面裾部に近い平坦部に立地し、1棟の住居跡がある。他の遺構はほとんどなく、土器も單一型式のみで遺物量はそれほど多くない。」ことから小林達雄氏の提倡したCタイプのセツルメント・パターン（小林 1973）に属する遺跡と解され、②地域の集団と密接な関連性を示すものと推定される。

（福岡嘉彰）

## 2. 遺物について

A地点の土器群は住居跡とその周辺の狭い範囲の平坦部から検出され、後期後半の短時期のものである。

本遺跡における土器は1片のみ台付土器（第7図5）で、ほかは深鉢形を呈すると考えられる。口縁部の特徴としては、平縁ではぼ直行する（第7図2・23～29、第8図1～4・6～8）が、第7図24・28、第8図4の様に内部に膨れあがった口縁をもつものもある。第8図5はやや内轉する。

土器の文様構成をみるとおよそ3種類に分けられる。①、口縁外部に連続して刻目を有するもの（第7図1・2）。②、細い沈線により区切られ、縦文帯と無文帯をくり返し、数段の帶縦文を構成するもの。③、第7図1・2・7・8・12・13の様に横位・縱位の弧線文により粗形の入組文状の文様が構成されるものである。また、縦文のみの口縁の直行する深鉢土器破片の大半はLRの縦文を施しているが、沈線文様を有する土器片の区画した内で外部の縦文はLRとRLを用い羽状縦文を形成している。③の類例は小千谷市三仏生遺跡第5類土器（中村 1957）、分水町幕島遺跡の土器（上原 1969）、朝日村熊登遺跡第I・II群土器（横山 1976）にみられ、三仏生遺跡ではこれらの縦文の地文を弧状に磨消し、多少浮き彫り的効果を求める手法の土器を関東の安行式前半のものに対比している。本遺跡からは三仏生遺跡第II類土器（所謂三仏生式）にみられる脣部に沈線と磨消縦文とで構成する帶縦文を主とし、その横位沈線間をコ状・S字状に区切る文様、土器内面のコ状・S字状の施文、発達した耳状の大型把手は認められない。つまり関東で三仏生式と併行期にあたる加曾利B式にみられる器形・文様構成は認められない。また熊登遺跡では第II群土器について東北日本に広く共通する諸要素をもち、東北南部の宝ヶ峰式の一部を含み、宮戸II d式といわれる土器群で、日本海側でも本県及び山形県に好例が知られているとし、三仏生式期の次期に比定している（横山 1976）。そして幕島遺跡B類は三仏生式の新しい一群と併行しており、山北町上山遺跡では幕島遺跡で併出する三仏生式の新しい一群は一切含まないことから、幕島遺跡B類の直後に上山遺跡の土器群が位置することが確実となつたとされている（上原 1969）。また、本遺跡では、東北地方の新地式（山内 1964）・金剛寺式（伊藤 1956）、あるいは宮戸II a・b式として把えられてきた所謂貼腹文土器は1点も検出されていない。これらのことから本遺跡A地点の土器は、資料的にも少なく早計はまぬがれないが、三仏生式の終末に位置し、関東の加曾利B式の範疇から、より東北的な土器群への移行を示す資料であると考えられる。縦文後期後葉の遺跡の発掘調査例が少なく、まとまった資料に乏しい現状ではあるが、今後本県の縦文後期中葉から後葉の土器型式も数段階に消長の度合をとらえることが可能であろうと考えられる。

B地点・C地点の土器は縦文中期前半のもので、16片出土している。これらの土器は本県に

比較的広く出土が認められる。縄文中期における信濃川流域の土器は周辺地域との関連性が強く、実に複雑多岐にわたっているため、その編年上の位置付けはかなり困難である。半截竹管による半隆起線文・爪形文が施されているこれらの土器は、関東の五領ヶ台式から勝坂式・富山県の新崎式と併行する時期であり、本県の代表的遺跡を2~3あげれば西蒲原郡卷町松郷屋遺跡（上原1956）・中頸城郡吉川町長峰遺跡（室岡1974）・三島郡三島町千石原遺跡（中村1971）などが良好な資料を提供している。

（稻岡嘉彰）

#### 〔参考引用文献〕

- イ 家田順一郎・戸根与八郎・木間信昭（1977）「片田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告第9 新潟県教育委員会
- 伊藤信雄（1956）「宮城古代史」宮城県史Ⅰ 宮城県
- ウ 上原甲子郎（1956）「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」弥彦角田山周辺総合調査報告書 新潟県文化財年報第一集 新潟県教育委員会
- 上原甲子郎（1967）「葛島」分水町教育委員会
- カ 金子拓男・千葉栄一・安達吉治・石沢寅二・寺崎裕助・室岡博・山口栄一・山崎弥作（1977）「長岡ニュータウン遺跡分布調査報告書〔1〕」新潟県埋蔵文化財調査報告書10 新潟県教育委員会
- コ 小林達雄（1977）「多摩ニュータウンの先住者 一主として縄文時代のセトメント・システムについて」月刊文化財 昭和48年1月号
- ナ 中村孝三郎・松崎庚一・寺村光晴（1967）「三仏生」長岡市立科学博物館研究調査報告書第1冊  
中村孝三郎（1966）「先史時代と長岡の遺跡」長岡市立科学博物館研究調査報告書第8冊  
中村孝三郎・小林達雄・竹田祐司（1971）「千石原」長岡市立科学博物館研究調査報告書第11冊
- マ 丸山松夫（1966）「遠古の郷土 一三島町二和村大槻地域の縄文文化」『郷土の生いたち』
- ム 室岡博・間 雅之・木間信昭（1974）「長峰遺跡発掘調査報告書」吉川町教育委員会
- ヤ 山内清男（1964）「小川遺跡」福島県史第6巻資料編1 考古資料 福島県
- ヨ 横山勝栄・田中真吾（1976）「熊堂遺跡」朝日村教育委員会



熊之宮遺跡遠景  
(東側より)



A地点  
(西北より)



B地点  
(写真中央・北側より)

図版第2図



A地点住居跡（東側より）



A地点住居跡（西側より）

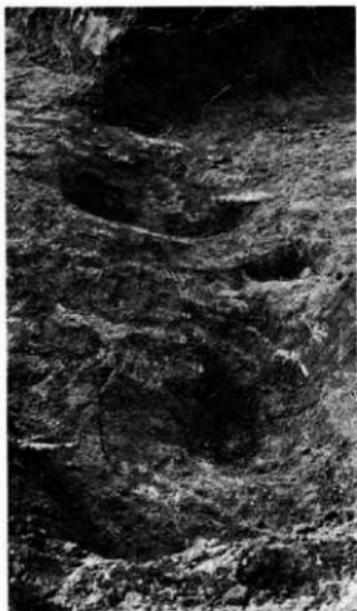


住居跡土層断面図（北側より）



第1号～第3号炭焼窯（北東より）

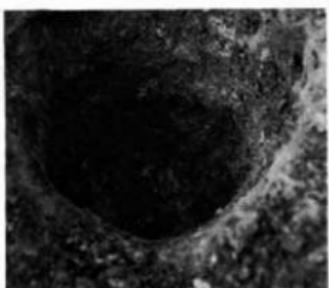
図版第4図



長円形溝状遺構



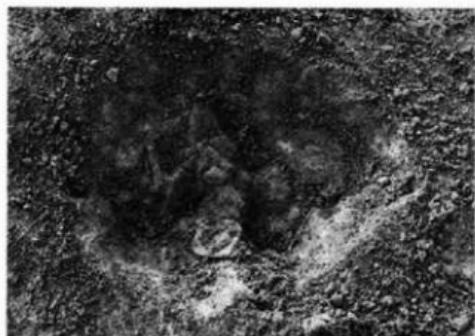
第2号埋甕状ピット土器出土状況



第2号埋甕状ピット完掘状況



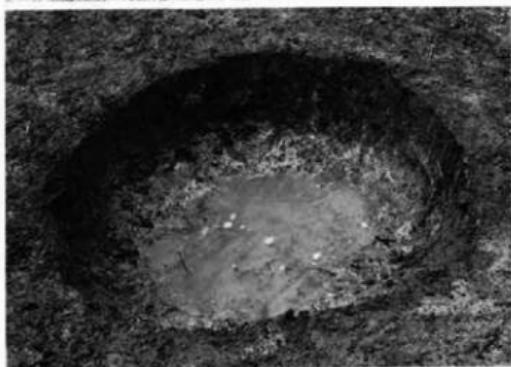
第1号埋甕状ピット土器出土状況



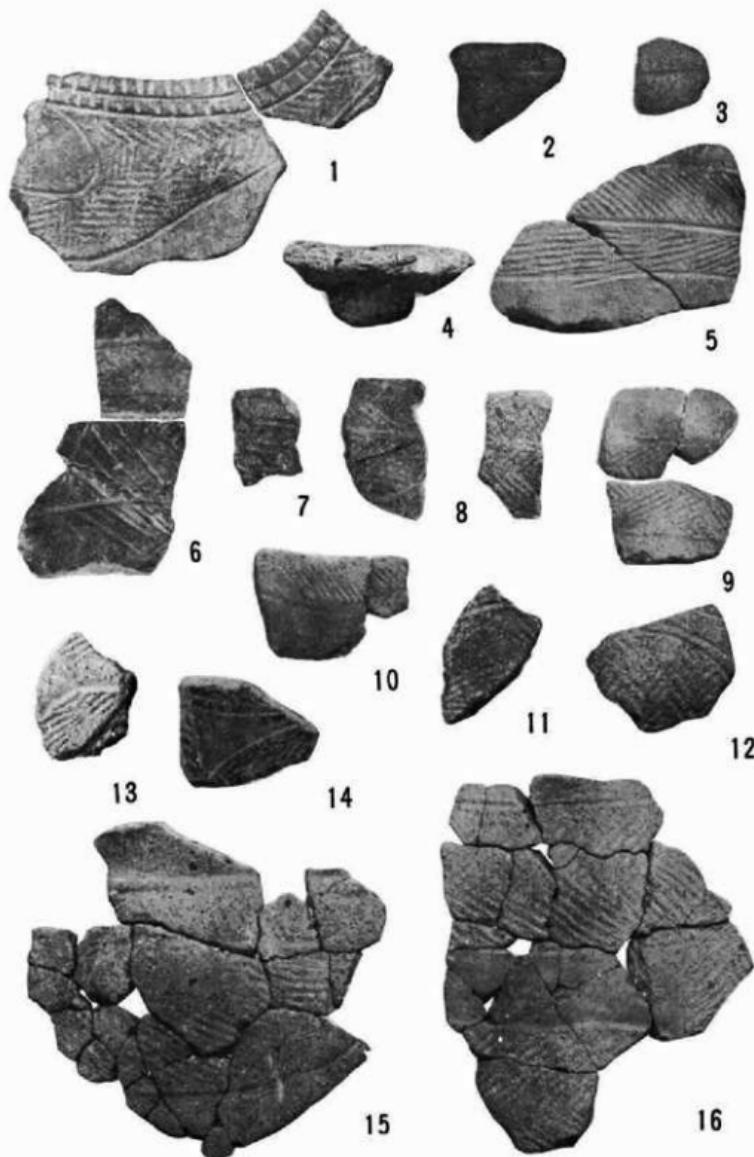
第1号埋蔵状ピット



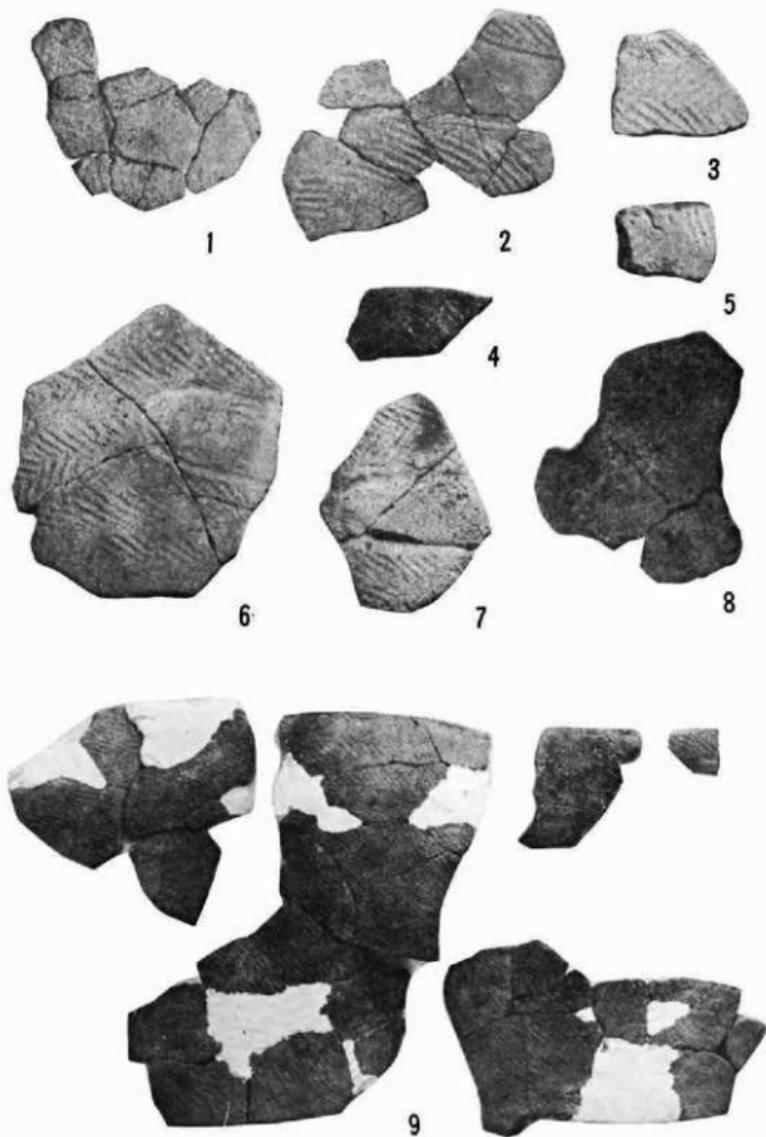
第2号炭焼窯



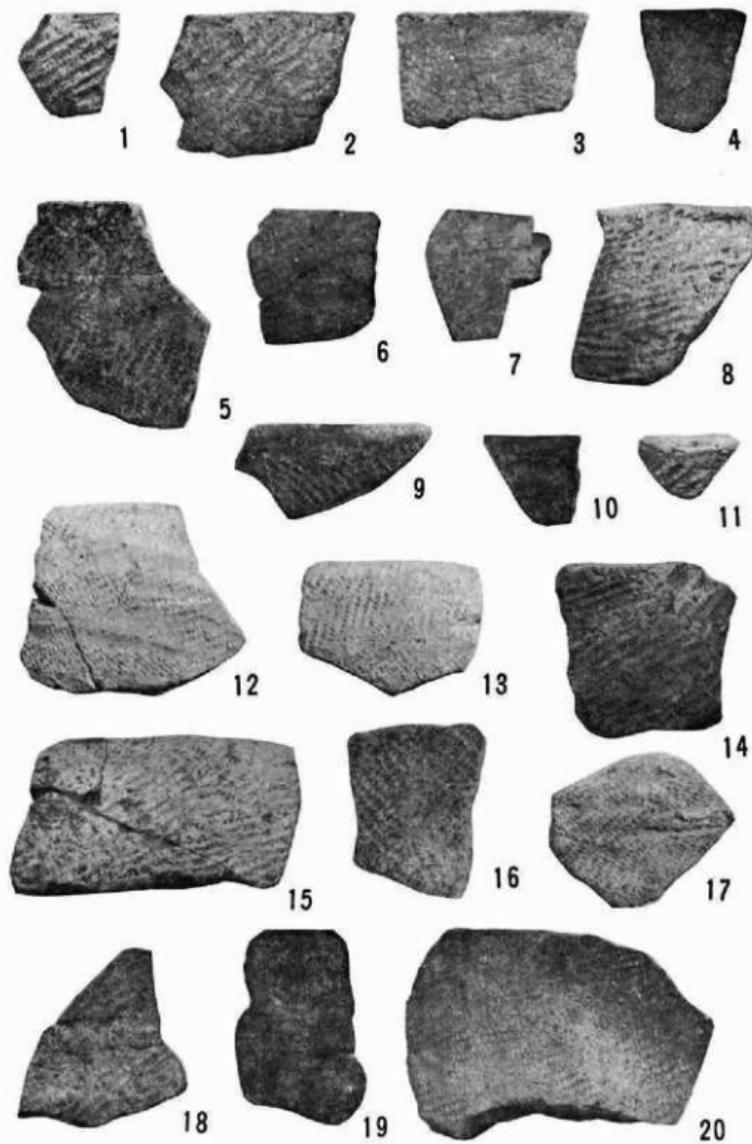
第4号炭焼窯



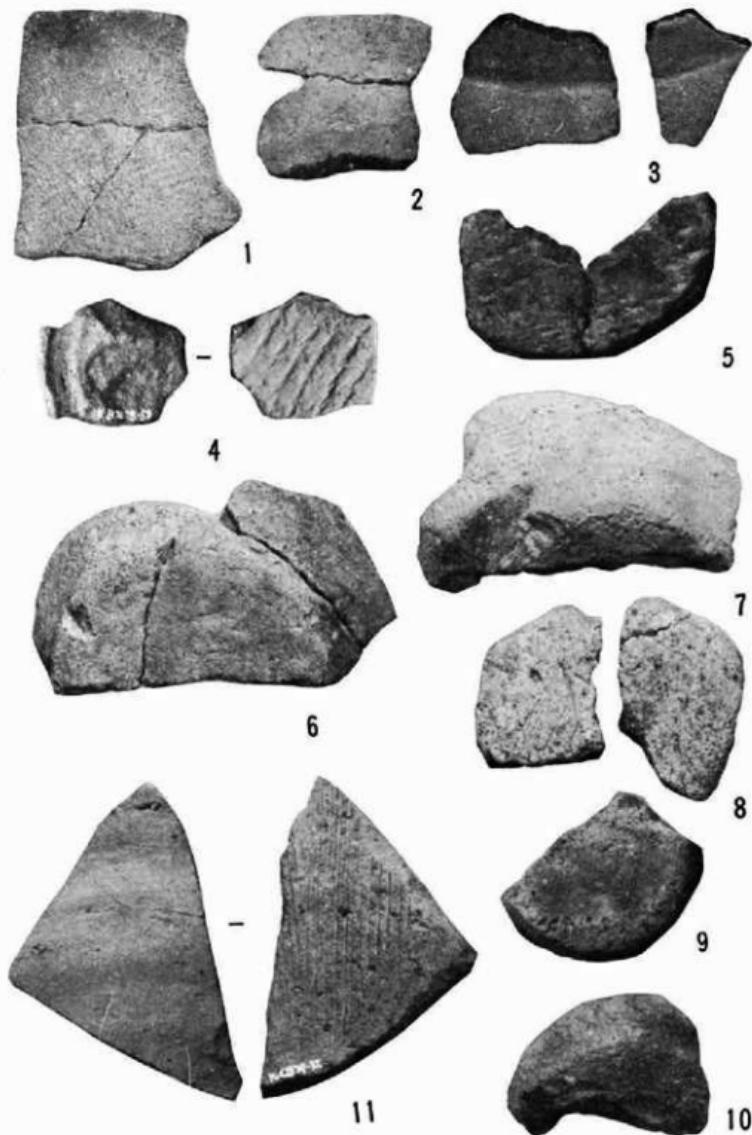
出土遺物(縄文土器)A地点 1/2



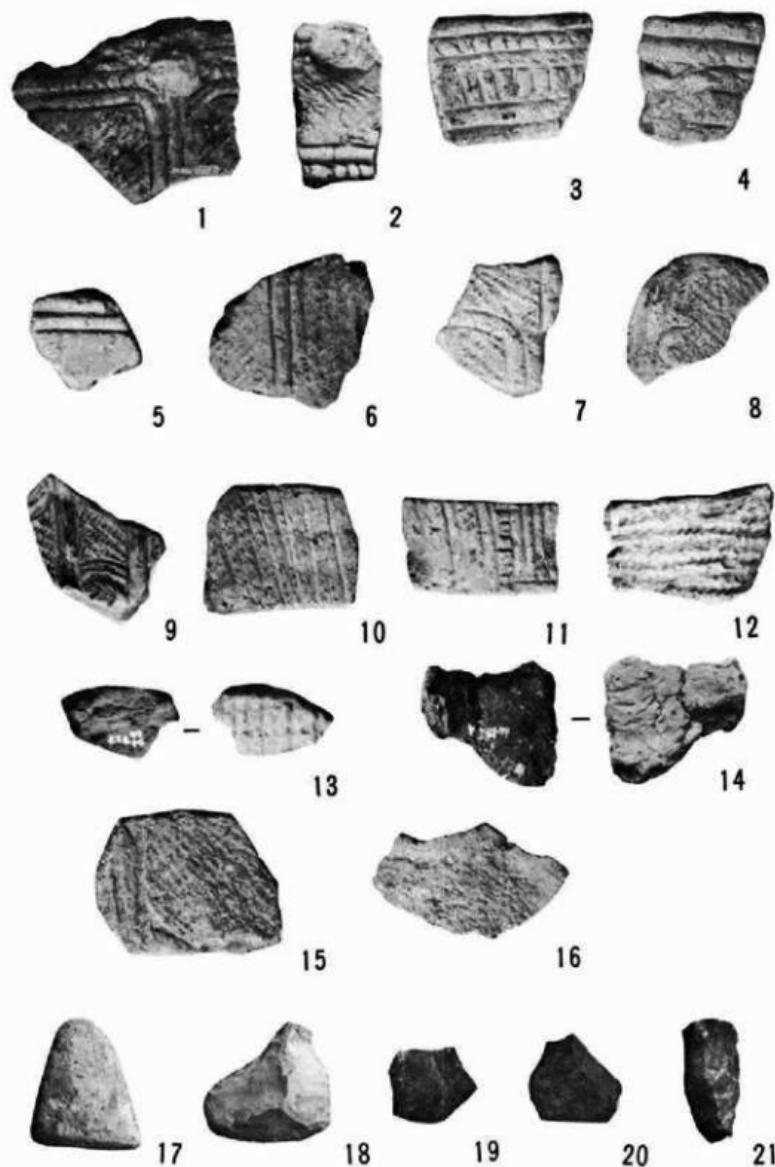
出土遺物(縄文土器)A地点 1/2



出土遺物(縄文土器)A地点

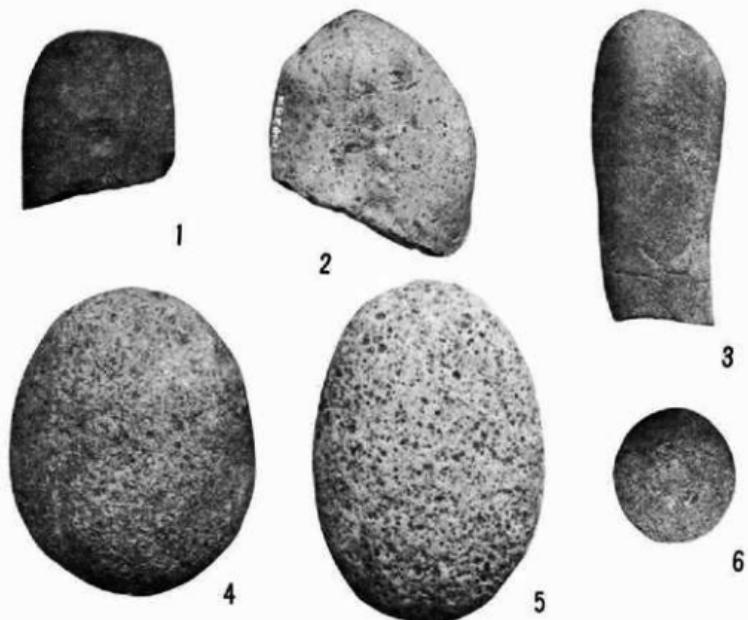


出土遺物(縄文土器他)A地点



出土遺物(縄文土器) 1~14B地点・15~16C地点 1/2

出土遺物(石器) 17~21 1/2



出土遺物(石器) 1～6 1/2・自然遺物(炭化栗)

新潟県埋蔵文化財調査報告書第12

北陸自動車道  
埋蔵文化財発掘調査報告書  
熊之宮遺跡

昭和53年3月29日 印刷

昭和53年3月31日 発行

発行 新潟県教育委員会  
印刷 ◎長谷川印刷  
新潟市学校町通1番町6  
TEL 3309番